

日 14/15 (2)

東京/中日新聞

(第3種郵便物認可)

溝埋める學術の新風

日中交流史シンポから

鈴木 貞美



国際日本文化研究センター(由文研)は九月二十三日から三日間、南京大学社会科学研究所と共催で、日中交流史を振り返り、今後の東アジアの知の在り方をさぐるシンポジウムを開いた。日中とも歴史や文学研究のベテランから若手までが参加。韓国やドイツの研究者も加わり、活発で充実した報告と議論がなされた。

偶然、国家間に緊張が走った時期と重なった。はたしてそんな最中に日中共同のシンポができるのか、といふかる向きもあるかもしれない。が、學術の世界に吹く新しい風は、たしかな足取りで、もつと遠くを目指している。南京は、何代にもわたる中国王朝の地。かの鑑真和尚が何度も日本を自指して出発した揚州にも近い。日本の王朝

との関係や僧侶たちの行き来を探り直す報告があり、十五世紀に日本の使節が中国の風俗を描いた貴重な記録を中国側が紹介すれば、戦時期を北

京で過ごし、毛沢東中国の誕生式典を飾るチヨウチンをデザインした日本人の苦難に満ちた一生をたどる報告が日本側からなされた。

南京虐殺事件の後遺症を追う中国側の報告は、一生を狂わされた被害者の女性の例とともに、「ある加害者は、犯した罪の深さに今もつなされ続けている」ことにもふれ、参加者の感動を誘った。

この事件をめぐって日中双方のあいだに横たわる溝は深い。今となつては確かめようもない死者の数を空中で争わせる状態がつづいている。日本側には、良識派でも、当時の日本の新聞報道からひろが

った六・八万人という数字が念頭にある。中国側の三十万人は、激しかった空爆の犠牲者から後遺症による死者までを想定している。そもそも双方のいう事件の範囲がちがうのだ。

新しい學術の風は、このような互いの立場や角度のちがいを知ることからはじめる。そして確実に言えることだけをひとつひとつ積みあげ、溝の深さを埋めてゆけよう。その姿勢を現地で事件の調査にたずさわる有力メンバーと確認しあうことができた。

今年の日韓併合百年だった。来年は辛亥革命百年。韓国にも中国にも自国のナショナリズムのなりたちと変化を正面にすえる研究が確実に広がっている。折しも十月初め、日文研の上部機関に当たる人間文化研究機構は、海外に流出した、また海外に出た日本人の足跡を示す史料を調査研究するプロジェクトを発足させた。日本の研究者にも、冷戦体制下につくられた古い図式から身をほどき、東アジアの歴史を見直す良い機会が続くだろう。

(つゆき・さだみ=国際日